

伊須流岐比古山を巡る

自然・文化・歴史 02 (pdf)

(令和八年七年七日、開山祭の祝詞奏上・能登復興祈願祭の読経奉納等の儀に当たり)

(一) 平和で国内一豊穡な瑞穂の恵みの大地、能越。当山の頂からは、能登国定公園の素晴らしい景観が眺望され、山波の綺麗な稜線が七尾と富山の両湾に沈む。南に白山連峰、西に遠く日本海、東に立山連峰と日本アルプス、北に七尾湾に浮かぶ能登島は半島岬の山並みが見事に聳える。この真中の森閑とした当山の清水と緑と生命が溢れる森の中に、高志加越能に特有な平和で豊穡な薫り高い家族的な風土（土徳）・歴史・伝統文化の幾多の粋が息付き、日本一の米所を眼下に有し、早くも奈良平安時代の朝廷東大寺の総荘園中約五〇数%強の荘園が集中、東大寺大仏殿建造費の過半捻出に大いに役立った由縁の地であり、つとに天下一の勅願霊場・聖地として津々浦々に衆知され、北陸七ヶ国を知行地として朝廷から賜り勸進知識米の勸財が許された他、全国水運の最大を占めた北前船にて、往時、坊院三百六十余、三千人の衆徒、石高四万三千石、残存分霊社数一三五（新潟六九、富山二一、石川一四、山形八等々、全国には同約三倍の多数分霊社）を有し、長らく他の諸霊場聖地を凌駕していた。

(二) 朝廷からの歴代長期に亘る勅願霊場。元伊須流岐比古神社山頂大御前には、第十代崇神天皇が寶劔を納めた宝満宮（伊須流岐比古神社）が創建された。第十二代垂仁帝第一皇子は、天竺僧法道の勅願祈祷にて、長じて初めて発音可能になった当地にて生涯を閉じた。三十九代天智帝以来勅願所となり、同四十四代元正女帝は大徳泰澄の仏場と成し、同四十五代聖武帝より天平寺の寺号を賜り、天平十八年国司大伴家持が当地に赴任、後万葉集編纂の詠歌の魂を得、四十六代孝謙帝は天平勝宝度を建立。その後、孝謙帝の勅使が登拝、同帝宣旨で二宮・三宮が造営され、重祚祈願が宝満宮で行われた。四十八代称徳帝勅使左大臣藤原家道、四方九里の地を賜い高志七ヶ国を勸進の地とす。泰澄死後、仁和寺・勸修寺の法親王交互に大宮坊座主位を管摂する。四十九代光仁帝の皇子智徳上人住跡号を大宮坊とす等々、当山の名声更に天下に高く、勅願、霊験新かにて、坊院三六〇、衆徒三千人となり、当山益々盛んになった。

(三) 度重なる天皇の復興論旨と前田家歴代藩主の加護。その後、南北朝関係の闘いで一山灰燼。光明天皇、尊氏に再建を命ず。京都の御室御所仁和寺・勸修寺との繋がりを強め、神仏習合・本地垂迹に祀る五柱の祭神を五社権現と讃え、御空蔵求聞持を以て、「行」三昧を中心にし、中世にては明確な宗派を越えて、専ら、和を以て尊しとする天下の勅願霊場聖地となった。一五一八年、後柏原天皇から諸堂再建の論旨を得、勸進活動が開始。一五三八年、後奈良天皇が大御前の社頭再興の論旨を出す。一五八二年、能登の守護畠山、越後の上杉、北陸を制した信長から能登守護となった前田利家公等の間での石動山合戦で、一山灰燼。一五八三年正親町天皇、秀吉に同山再興の論旨を下す。

同年、利家公、金沢城を居城とし、金沢を尾山と改名。又同年、秀吉、利家公に加賀・能登・越中の三国を与え、ここに加越能一百万石の発展の礎ができた。前田藩歴代諸藩主公は、当山を加越能の平和と豊穡な伝統文化のシンボルとすべく、種々の保護を殊の外篤く賜り、当山は、類まれな四万三千石となり、神仏習合面で他を凌駕（当時、高野山二万三千石、比叡山五千石、熊野三千石）。加賀藩二代藩主前田利長公御夫人が木造十一面観音像を寄進、利家公夫人が大宮坊に打敷を二度寄進、利常公が式目十一状を制定（神社の祭典を厳修・朝廷への巻数を毎年倦怠なく奉納・諸国勸財の浄財にて社殿・堂塔の営繕に尽くす等）、ここに絶えていた天皇の御撫物の儀が毎年復活、朝廷の除厄祈祷を怠りなく励行。これ等精励にて、当山の厳めしい勅願所としての威容を天下に示し、加賀藩は、朝廷の威光従来以上賜り、天皇家との婚姻関係も深く篤くなり、徳川御三家を凌いだとも言われた。慶安五年（一六五二）、利常公からの百石の同山宛寄進を受け、藩主の神納米は百五十石に

増加。利常公は五社権現信仰が深く、承応三年（一六五四）当山にて母の病氣平癒祈念し、林羅山（父祖は加賀出身）に依る当山縁起を奉納、伊須流岐比古神社の本殿を再建賜る。現在の本殿はこの時に再建され、拝殿は一七〇一年建立され今に至る。

（四）和を以て尊しとする能登の土徳の象徴、当山の高名は世に広く響き渡った。加賀藩は、絶対的な平和・中立・不介入・不可侵を藩是（最優先政策）とし、幕府や他藩から平和への如何なる危機をも用意周到に回避すべく常に細心の配慮を傾注。又、文治最優先を掲げ、江戸屋敷での夫人の人質制度、参勤交代等の自発的提言と精励にて、全国に忠義の範を示し、江戸時代の文化・社会的な真髓を形造られるに、偉大な御貢献をなさいました。例えば、吉宗将軍は、加賀前田藩は徳川御三家の範とも公言されるに至りました。加賀の地は、茶道（裏千家）、芸術、工芸、美術、学問、能楽、詠歌等の文化保護では、他藩に類なく、明治期以降も各分野に優れた世界的な逸材を連綿と多数輩出。平和で薫り高い伝統文化の精華が、家族的日常生活に自ずと浸透、深化し、協創相生、自治共和、自立自由の地となり開国開明策を積極的に推進されました。

（五）だが、薩長藩閥の明治政府は、神仏分離令、廃仏希釈運動を起し、当山は、勸進米停止令、衆徒還俗、無償下山命令、仏典・過去帳・縁起書の破棄等徹底等、武断的な壊滅を余儀なくされ、善人の老若男女の涙、底なしの嘆きさえもが枯れる大規模な人災悲劇を強い、著しい荒廃一途の苦渋の茨の厳しい道を、平然と、余儀なくせしめた。

当神社はこれ等幾多の苦難を生き延びた唯一の貴重な歴史的文化財故に、その復興は今や関係者全ての、心からの強く深い悲願であり、多くの人々の特段のご理解とご協力にて万障繰合せの上、是が非なり共、速やか円滑な復旧を祈願中で御座います。何卒、皆々様の格別の寸志ご厚情とご支援を賜りますよう、衷心お願い申し上げます。

（六）令和八年の当山開山祭に当たり、祝詞奉上を賜り、当神社の迅速円滑な本格復興と未長い安全無事を祈願しつつ、令和六年能登大地震の大規模な被害の速やかな復興を衷心深く厚く祈願申し上げ、又、同大地震で大破した虚空蔵菩薩像様と胎内聖観音像様の無事な修繕里帰り、更には、先般の盗難にて破損した当神社の最高位神仏本持の虚空蔵菩薩像様の無事な修繕完了の有難き此の期に際し、社会各方面に亘り、益々平和で豊かな文化的な安寧、そして、皆々様方の更なる御幸福、御健康、御飛躍等実現をば、心から深く篤く祈願申し上げるために、山岳修験行者に依る護摩焚きを行い、護玉符（御守札：「伊須流岐比古神社 五社権現 天平寺」（当神社宮司、清水様直筆）に、参加者多数夫々の御祈願をお書き頂き、護摩火中に投下、祈願成就の儀を五社権現の御前にて、厳かに執り行わせて頂きました。